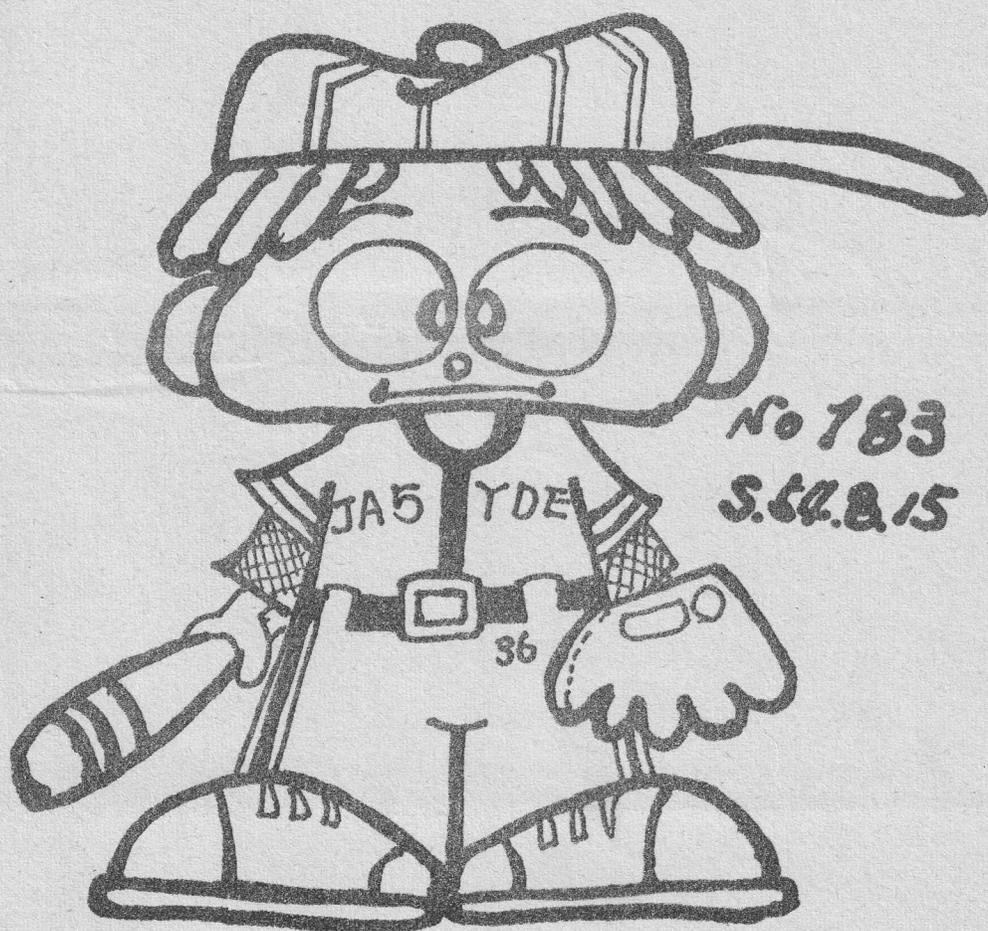


香川クラブ報



社団法人 日本アマチュア無線連盟香川クラブ

お知らせ

香川クラブ フィールド ミーティング

日 時 54年8月5日(日)
AM 09:00分 出発
集合場所 浅野ドライブイン
行 先 吉野川流域にて飯合炊さん
徳島県脇町近辺

飯合をお持ちの方は御持参下さい。

副食品は用意致して居ります。

多数の御参加をお待ち致して居ります。

交通安全 フォックス and ラリー

日 時 54年9月23日(日) AM 09:00 集合
場 所 高松工業高等専門学校西の香東川 河川敷
参加資格 ① 2人1組で参加のこと。
② うち1名はアマチュア無線局長又はS W Lである
こと。
③ その他に家族の同乗は可。
④ 周波数 144 MHz帯使用
参加費 1台につき¥500

(注) 参加車多数の場合は交通安全のため先着50台までとする。

屋島寺の思い出 Ⅱ

JA5RYG 石川 茂男

それが、今お話した太三郎狸でした。その狸は、「和尚さん、お目醒めでしょうか、私は、太三郎と申しまして、この屋島寺に九百年あまりお仕えしています。」私は余りのびっくりに、「うんうん。」と返事にならない返事にしていました。すると、その太三郎狸は、「今日は和尚さまが、この屋島寺の第二十八代の住職さまになられたお祝にうかがいました。」「何かお祝いの品でもさし上げたいのですが、いかんせん、私は狸の身、何にも持ち合せていないのが残念です。そのかわりに和尚さんに珍しい、絵巻物のようなものを、お見せしましょう。」と言って太三郎狸が案内してくれたのが「ほれ、この客間からも見えるその庭でしてな。」と言って住職さんが案内してくれた庭は、真白であたり一面に雪がふった様な感じであった。普通、庭と言うと土の色が茶色か黒色、或るいは苔のこい緑なのだが、この屋島寺の庭は、あたり一面が真白である。和尚さんの話によると何でも凝灰岩が、この庭全面をおおっていてそれで白いのだそうである。

私は庭に出て見てびっくりしました。いつもの庭がなくて海になっているです。そして海には幾艘もの舟が浮かんでいました。こちらの方の舟には、赤い旗がたち沢山の女官や武者が乗っており、向うの舟には白い旗が立ち、鎧兜で身をかためた武者が沢山乗っています。乗っている人の顔を見ると歴史で習った源義経、那須の与一の顔も見えますし、佐藤継信の顔も見えました。あちらの方の舟にはおそれおおくも安徳天皇をはじめ能登守教経、菊丸の顔が見えました。そうです。源氏と平氏の武者達なのです。両方で何か大きな声で話し合っていました。がしばらくするとこちらの方から女官を乗せた一艘の舟が進み出て、両者のほぼ中央あたりで止まりました。目をこらしてよく見ると舟のへさきに一人の女官が立ち、そのそばに高く1本の竿が立てられ、竿の先端には日の丸を描いた扇がありました。やがて向う側から馬

に乗った若武者が進み出て矢を放てば扇に当たったのでしょうか、扇が一きわ高く舞い上ってから花びらのように海に散りました。それから双方の舟が入り乱れて合戦、義経が舟を次から次へととんだりしていました。ものの2時間も戦いが続きましたでしょうか、こちらの平家の舟は左の方へ一せいに逃げ初めそれを源氏の軍勢が追っていきました。やがて源氏の最後の一艘の舟が向うの方へ消えますと後はいつも見なれている瀬戸内海の景色が残るばかりでした。

私は源氏と平家が八百年の昔にこの屋島で行った源平合戦の模様をこの庭でまのあたりにに見たわけです。「トン」という音が聞こえると今迄見えていた瀬戸内海はまるで潮がひくようにかき消えてあとには皓皓と日に照らされた白い雲の庭があらわれました。私はまるで狐に化かされた様でした。いや狸に化かされた様でした。

そして何時から居たのか太三郎狸が私の側に坐っていて

「和尚さん、源平合戦は如何でしたか。」

と神妙な顔をして言うので私は源平合戦の興奮もさめやらず、まるで侍大将にもなった様な口吻で

「見事じゃ、見事。ほめてとらすぞ。」

と、言ったものでした。

「あれ程上手に化けられるお前は四国一、いや日本一の狸じゃ。」

と、太三郎狸を誉めますと太三郎狸は一寸恥かしそうに下を向いて

「私も、一度だけ失敗があります。」

と、いうのでいやがる太三郎狸に無理に頼み込んで話を聞いたものです。

それは、今から300年ほど前の春のことです。阿波の金長が狸試合を申し込んできました。「何ですか狸仕合とは。」和尚さんは、わからないので狸に聞きますと、狸仕合とは尻尾に白いもののある、つまり自由自在に化けけることができる狸同士が化け比べをすることだそうである。そこで狸試合の当日太三郎は、お得意の源平合戦を演じて見せました。金長狸は、太三郎の源平合戦を見て手を叩いてほめたそうである。そこで太三郎が「さあ、今

度はお前の番だ。やって見ろ。」と、言うとき金長狸は「実は今日は、お腹が少し痛い。すまんが、わしが化けるのは明日にして。」と、さも腹が痛そうにして懇願するので、太三郎狸も大将の貫禄を見せて「それならば、致し方あるまい。それでは明夜またここで会おう。」と、言って別れようとするとき、金長狸は「いや、明日昼の一時頃、長尾街道の松並の中央の高い松の枝に腰かけて見ていてくれ、わしがある下を化けて通るから。」と、言うので太三郎狸は承知しました。さて当日は、太三郎狸が松の中程にある松に腰をかけて待っていました。約束の一時がすぎたのに街通の下には、人一人も通りません。太三郎狸は「金長狸め一体何をしておることやら、昨日の腹痛がうんと悪くなったのかな。そうでなければいいんだがな。」と、人のいい、いや狸のいい太三郎は一人心配しています。大分時間が経って太三郎狸が、これは金長狸の腹痛の工合でも見に行ってみようかと思って腰を浮かしたところ、向うの方から「下にいー、下にいー。」と声が聞えてきました。やがて声と共に現れたのは、阿波の殿様蜂須賀公の参勤交替の行列です。行列は、先触れ、中間槍持ち、馬廻り、殿さまの駕籠、御女中など延々と続きます。そして、それらの、れぞれが役にあった衣裳を着て、道具を持って、威厳を正して、ほんとうの殿様の行列のようです。

太三郎狸は、この行列を見て、約束の時間には少し遅れたけれども、てっきり金長狸が化けたものと思いこみました。多少、化ける準備には時間がかかったけれど、よく化けたわいと思いました。

見れば見る程、その行列は立派でした。一人一人の侍の衣裳の模様も違うし、腰に差している大小の刀のサヤの模様も違えば、時折見える印籠も作りが違います。

殿様の乗っている駕籠にほどこしている蒔絵も、それは、それはよく出来ていて、ほんものそっくりです。

はいている藁ぞうりのちびよう、脚はんについている土ぼこりまで、これ以上の出来ばえはないぐらいです。

太三郎狸は、

(これ程、金長が化けるのがうまいとは知らなんだ。ほんとに、よく化けたものだ。)

と、心の底から感心しました。そこで、太三郎狸は、腰をかけていた松の木から降りて、

「金長、よくやった。よくやった。ほんとにお前は上手だ。」

と、ばかりに、手を叩き、尻尾を叩いて、ほめそやしました。

驚いたのは、行列の人々です。

実をいうと、この行列は、金長狸が化けたのではなく、正真正銘、殿様のお国入りの行列であったのです。その行列の進む街道へ、狸がいきなり飛び出してきて、立上り、前足を叩いたり、尻尾で地面を叩いたりしています。そして尻尾で地面を叩く度に、小さな石ころや、砂が飛んできます。

江戸時代には、殿様の行列が通る時は、庶民は、道端の両側で土下座をするのが習わしです。それを、狸が立っていて、しかも、前足を叩いたり、尻尾を振ったりして、小石や砂を飛ばしてくるのですから、行列の供侍は怒りました。

「それ。」という供頭の侍の合図とともに、六尺棒を手にした中間が^{ちのうげん}4、5人、行列から飛び出してきて、よってたかってその六尺棒で、太三郎狸をなぐりつけました。

太三郎狸は、金長狸が化けたものと思っていたので油断しているところを、「ごつん、ごつん。」としたたかに六尺棒で、思いきりぶたれました。

「金長、金長、何をするんだ。」

と大声で叫んでも、いっこうにぶつのを止めません。太三郎狸は、したたかに、棒でぶたれ、頭から足までケガをして、ほうほうの体で逃げ出しました。屋島寺の我が家へ逃げ帰って、20日余りも寝込んでしまいました。

太三郎狸は、正直に、長尾街道の松並で見た行列は、金長狸が化けたものと思い込んでいるから、今もって、ぶたれた理由がわからない。

「あのおとなしい金長が、棒をふるって、わしをぶつはずがないんだが、どうしたのかなあ。」と金長狸のことを思っている。

そんな太三郎狸を、親友の浄願寺の秀狸が見舞いに来てくれました。

「太三郎さんや、ケガの工合はどうじゃ。ちいっとは、良くなったか。」

「ありがとう、秀さん。お蔭さんで、ケガの方は、毎日良くなって、後、少しのしんぼうだ。」

「ところで、秀さん。わしは、一体何故ぶたれたのか、一向にわからんが、どうしてぶたれたんかのう。」

と質ねました。

「聞くところによると、金長狸は、君のお得意の源平合戦を見て、これでは、とてもものに勝てん。どう、うまく化けても、勝ち目はない。さりとて、あっさり敗けましたと言うのは、口惜しい。そこで、君との試合の翌日に、阿波の殿様の行列が、長尾街道の松並を通るのを知っていることを幸い、君に、松の上から見物するようにと行って、自分はさっさと、小松島へ帰ったそうだ。」

「そうとは知らぬ君が、松の上から、ほんものの行列を見ていた訳だ。」

「だから、行列がよく出来ているのは、当然のことなんだよ。」

「金長は、君がずっと松の木の上で見てくれているものとばかり思っていたのに、ああゆうことになり、棒で叩かれて、気の毒なことをした、と言ってるそうだ。」これを聞いた太三郎狸は、

「「金長め、わしを騙したな。」と怒りましたが後の祭です。」

その後、300年位経ってからやっとのこと、浄願寺の秀さんの取りなしで、なんとか、仲なおりをしました。が、今だに金長は気の毒がっているようです。

和尚さんは、源平合戦や行列合戦の話は面白くて熱心に聞いていましたが、何分にもここ数日の徹夜の疲れがひどくて、浄願寺の秀さんが何とかかんとか聞いてるうちにいつとはなしに眠ってしまいました。(つづく)

社団法人 日本アマチュア無線連盟

香川クラブ報

発行責任者	JA5MG	稲毛 章
編集者	JA5IKJ	青木 俊士
〃	JA5IRP	人見 和郎
〃	JA5PZL	高畑 康男
連絡事務所	761-01 高松市高松町 [REDACTED]	

[REDACTED]
清川 隆美 (JA5KWF)